



Title	Miscellanea Blandede
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN 一北欧研究一. 2025, 25, p. 85-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[資料]

Miscellanea Blandede

新谷 俊裕

1. 辞書編纂にインターネットの活用は不可欠

本誌 *IDUN* 19 号の拙論（新谷俊裕. 2011. 「デンマーク語辞典編纂にインターネットを活用する. 付録: 改訂「デンマーク語 (スウェーデン語・ノルウェー語) の海水魚類名称の日本語訳」, *IDUN* 19 号, 89-122.」で既に記したように, 筆者は 1990 年代中頃から他の 3 名の研究者とともに, 見出し語 1 万語で, 例文を豊富に載せた学習辞典的なデンマーク語-日本語辞典の編纂を開始し, 2018 年に一応, 原稿を完成させることができた. しかしながら例文の 9 割以上がポリティケン社の *PSNN* (略号については下記参照) と *PNOE* からのものなので, 著作権侵害に当たる可能性があるのではという指摘を受け, ポリティケン社, さらに現在 *PSNN* と *PNOE* の版権を所有しているネット辞典を展開している会社に連絡をしたが, 良い反応がなかったので, 同辞典は出版できない状態にある. そこで筆者は *PSNN* と *PNOE* に由来する全ての例文を, 電子版がネット上で公開されているデンマーク語辞典 *DDO* と *ODS* ならびに公開されているコーパス *KO* にある例文と置き換えることにして, これらを出版あるいは公開しているデンマーク語・文学協会 (Det Danske Sprog- og Litteraturselskab: DSL) にコンタクトをとったところ, *DDO* の例文をそのまま使うのは禁止であるが, それらの例文を短く加工して使うのであれば OK ということになった. 筆者は例文を *DDO* と *ODS* とコーパス *KO* の他に, 多数の教科書, 文法書, 辞典や多数の短編小説 (noveller) と長編小説 (romaner) からも収集することにした. その置き換え作業の途中で気づいたことを以下に記す.

1.1. 利用した辞典

デンマーク語-英語辞典 : *DaEn* = Axelsen, Jens. 1995. *Dansk-Engelsk Ordbog*. 10. udgave. Gyldendals Røde Ordbøger. København: Gyldendal.

デンマーク語-英語大辞典 : *DaEnS* = Vinterberg, Hermann & Bodelsen, C. A. 1990. *Dansk-Engelsk Ordbog*. 3. udgave. Gyldendals Store Ordbøger. København: Gyldendal.

現代デンマーク語辞典 : *DDO* = Den Danske Sprog- og Litteraturselskab. 2003-2005. *Den Danske Ordbog*. bind 1 – Bind 6. 1. udgave. København: Gyldendal.

[ネット版] <https://ordnet.dk/ddo/forside>

デンマーク語-フランス語辞典 : *DaFr* = Blinkenberg, Andreas & Høybye, Poul. 1991.

Dansk-Fransk Ordbog, Fjerde reviderede udgave. København: Handelshøjskolens Forlag, Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck.

デンマーク語－ドイツ語大辞典 : *DaTy* = Bergstrøm-Nielsen, Henrik & Lange, Henrik & Verner Larsen, Henry. 1991. *Dansk-tysk ordbog*, Munksgaards store ordbøger. København: Munksgaard.

デンマーク語コーパス : *KO* = KORPUS DK

デンマーク語大辞典 : *ODS* = Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. 1975-1977 (1918-1954). *Ordbog over det danske Sprog*. 1. bind – 27. bind. København: Gyldendal.

ポリティケン新現代デンマーク語辞典 : *PSNN* = *Politikens Store Nye Nudansk Ordbog*. 1. udgave, 2. oplag. 1996. København: Politikens Forlag.

ポリティケン語源付き現代デンマーク語辞典 : *PNOE* = *Politikens Nudansk Ordbog med etymologi*. 1. udgave, 2. oplag. 2000. København: Politikens Forlag.

1.2. 見出し語 *afsnit* について

2018 年に一応完成させた原稿では見出し語 *afsnit* に関する説明は以下のようになっている〔下線をほどこした部分に注目すること〕：

afsnit ['aw,snid] [名]：段落，一節，部分，パート；(連続している番組の)部，編；病棟，科；段階，時期，期間；〈数〉線分// Sidste ~ kan godt slettes. 最後の段落は削除できる・してよい。Serien sendes i fjorten ~. そのシリーズは14部に分けて放送される。-tet for langtidssyge er overfyldt. 長期入院病棟は一杯である。Et ~ af mit liv er nu forbi. 私の人生の一段階が今終わった。

問題となったのは下線をほどこした病院に関する意味の部分である。見出し語 *a* から *ansøgning* までは筆者が担当した部分ではないが、1997 年には原稿が完成していた。この部分の担当者はデンマーク語辞典 *PSNN* と *ODS* およびデンマーク語－英語辞典 *DaEn* と *DaEnS* を参照したと思われる。*afsnit* の病院関連の意味は *DaEn* と *DaEnS* には載っていない。また、下の *DDO* の記述から分かるように、*afsnit* の病院関連の意味の使用が 1955 年以降であるために、*ODS* には当然載っていない。したがって当該担当者が唯一参照できたのは以下の *PSNN* の説明だけである。

PSNN の記述 (なお後の *PNOE* の記述も同じである) :

afsnit

2. en afdeling, fx på et hospital = AFDELING □ *afsnittet for langtidssyge er overfyldt*

例えば、病院の病棟、科 = AFDELING □ 長期入院病棟は一杯である見出し語 *a – ansøgning* の原稿をチェックした筆者はさらにデンマーク語 – ドイツ語大辞典 *DaTy* も参照したが、そこにも afsnit の病院関連の意味は載っていない。

PSNN の記述によると、*afsnit* = *afdeling* であるから、「病院の病棟、科」と訳してなんら不都合はないし、例文 *afsnittet for langtidssyge er overfyldt* を「長期入院病棟は一杯である」と訳して不都合はない。しかし今回筆者が *PSNN* と *PNOE* に由来する全ての例文を *DDO* と *ODS* ならびに *KO* にある例文と置き換える作業のために *DDO* の記述を見て、*PSNN* と *PNOE* の記述は間違いであることが分かった。

DDO の記述：

afsnit 3 ● mindre, organisatorisk del af et hospital (*kendt fra 1955*) □ *Amtet ønsker etableret et lukket ungdomspsykiatrisk afsnit med 8 sengepladser på Amtssygehuset i Glostrup*
afsnit 3 ● 病院の比較的小さな組織化された部分 (1955 年から知られている) □
 アムトはグローストロプのアムト立病院に 8 病床を持つ閉鎖型青年精神医学部門が設置されることを望んでいる

「病院の比較的小さな…部分」という説明は「病棟、科」ではないような印象を与えるし、例文中の「8 病床」というのはアムト立病院のような大きな病院の病棟にしては病床数が少なすぎるのではないか? *KO* にはさらに 2 病床少ない「6 病床を持つ afsnit」の例文も載っている。また, *Afdelinger og Afsnit på Holbæk Sygehus (Afdelinger - Region Sjælland (regionsjaelland.dk))* 「ホルベク病院の *afdeling* と *afsnit*」というホームページでは、例えば、*Endokrinologisk Afsnit 「内分泌学の afsnit」* の説明の出だしは、*Afsnittet er en del af Medicinsk Afdeling: 「当 afsnit は内科の一部です」* となっていることから、*afsnit* = *afdeling* とする *PSNN* と *PNOE* の説明は誤りであり、*afsnit* は「～科の一部、すなわち(小)部門」とするのが妥当であると言えよう。上記 *DDO* の例文も *Sundhedsministeriet* 「保健省」のホームページからのものであるし、*DDO* の多くの例文は *KO* に由来している。筆者もインターネットで *KO* や *Google.dk* を活用した結果、*afsnit* の病院関連の意味を特定することができた。その結果、見出し語 *afsnit* の意味の説明を修正した部分 (下線部) と例文を全て置き換えたものを以下に示す。

afsnit [ˈɑv̥snɪt] [名]：段落、一節、部分、パート；(連続している番組の)部、編；
病院の科の小部門；段階、時期、期間；〈数〉 線分 // *De manglede sidste fire* ~

af artiklen. 彼らはその記事の最後の4段落が欠けていた。 Serien kører i 170 ~. そのシリーズは170部に分けて放送される。 Talen falder i tre ~. その演説は3つの部分に分かれている。 et ungdomspsykiatrisk ~ med seks senge 病床6床を持つ青年精神医学部門。 -tet er en del af Medicinsk Afdeling. 当部門は内科の一部です。 et vigtigt ~ af ngs liv …の人生の重要な一段階。

2. デンマーク語は発音が世界で一番難しい言語の一つと言われることがあるが、それはなぜか？

「デンマーク語は発音が世界で最も難しい言語の一つである」という表現を筆者が耳にしたのは確か筆者が1977年にコペンハーゲン大学で音声学の授業に出ていた時に担当の先生が口にした時だと思われる。インターネット上でも様々な外国人がデンマーク語は何を言っているのか分からぬ、発音が難しいと言っているし、デンマーク人自身もそう思っているふしがある。2010年にデンマークに滞在していた時にたまたま見たテレビニュースで *Lektoratsudvalget* のサマーセミナーの様子が放送された。 *Lektoratsudvalget* とはデンマークの教育・研究省下に置かれた組織で、外国でデンマーク語を教えていたる大学にデンマーク人のデンマーク語教師を派遣するのを命としている。例えば、東欧の国などではある大学でデンマーク人教員を雇うとすると給料がデンマーク国内の給料と比べると非常に少なすぎるので、誰もその職に就く者はいないが、それではデンマーク語を普及することに支障が生じるので、デンマーク政府は現地での給料とデンマーク国内の給料の差額を国が負担することでそのような国々にデンマーク語教員を派遣しているのである。そしてそのような派遣教員を毎夏呼び戻して1週間弱のサマーセミナーに参加させるのである。筆者は一度招待されてそのサマーセミナーに参加したことがあるが、朝の9時から夕方までみっちりとプログラムがあり、晩にはグループに分かれてディスカッションをする。2010年に見たテレビニュースではそのディスカッションの場面にテレビレポーターがいて、派遣教員の一人に質問をしていた。「デンマーク語を教えていて、何が難しいのでしょうか？ やっぱり発音ですか？ *rødgrød med fløde* と言わせるのですか？」と。それに対して派遣教師は「そうですね、でも *rødgrød med fløde* よりも *to røgede ørreder* の方が難しいですよ…」と話していた。デンマーク語は発音が難しいとデンマーク人自身が思っている証である。因みに *to røgede ørreder* とは「二尾の燻製した鱈」という意味である。筆者は友人と一緒に釣り上げた鱈を友人宅で燻製にしてよく食していたので、*røgede ørreder* は言い慣れた表現であるが、この表現の中には *rødgrød med fløde* 同様に口蓋垂音であるデンマーク語のr-音、øという文字が表す前舌円唇母音、そしてデンマーク語独特のdが表すSoft Dの音（オン）が入っ

ている。これらの音は日本語や英語しか知らない人やイタリア語やスペイン語しか知らない人には練習しないとすぐには発音できない音であろう。しかしデンマーク語の r-音はフランス語や標準ドイツ語の r-音と同じものであるし、前舌円唇母音もフランス語や標準ドイツ語にもあるので、フランス語やドイツ語ができれば、デンマーク語のこれらの音はそれほど難しいものではないし、Soft D も少し練習すれば発音できるようになる。筆者は大阪外国語大学でデンマーク語を勉強し始めた時には既にフランス語の発音をほぼ身に着けていたのでデンマーク語の個々の発音にそれほど苦労はしなかった。それでもデンマーク語は発音が難しいと思っている。

2.1. では、なぜか？

デンマーク語の教科書（新谷俊裕・Thomas Breck Pedersen・大辺理恵. 2014 年. 『大阪大学外国語学部 世界の言語シリーズ 10 デンマーク語』, 大阪大学出版会）の p.3 の「デンマーク語 簡略母音表」を見て分かるように、例えば日本人にとって特に発音が難しい母音は前舌円唇母音 [y], [ø], [ö], [ɔ] だけであろう。しかしこれら前舌円唇母音は、既に上で述べたように、フランス語やドイツ語にあるので、世界的に最も発音が難しいことにはならない。子音に関しても、同教科書の p.8 の「デンマーク語 子音表」を見て分かるように、日本人にとって発音が難しい子音は口蓋垂音の [r] と歯音・歯茎音の Soft D [ð] だけである。口蓋垂音の [r] は、既に上で述べたように、フランス語やドイツ語にあるし、Soft D [ð] はデンマーク語独特の子音であるが、少し練習すると習得できる。以上のように、母音に関しても、子音に関しても、デンマーク語が世界で発音が最も難しい言語の一つであるとは言えない。

では、なぜデンマーク語の発音が難しいのであろうか？ それは綴りと発音の乖離が激しいことが原因であろう。親類関係がデンマーク語に最も近いスウェーデン語ではスウェーデン語の教科書（清水育男・ウルフ・ラーション・當野能之. 2016 年. 『大阪大学外国語学部 世界の言語シリーズ 12 スウェーデン語』, 大阪大学出版会）の p.3 の「1.3 文字と発音」に「スウェーデン語の文字と発音はほぼ一致している。したがって読むときは、ほぼローマ字通りでよい。文字がその連続によりやや特殊に読まれたり、サイレント（黙字）になったりすることはあるが、それらも一定の規則を覚えてしまえば、それ以上の例外は少ない。」とある。フランス語も綴りと発音が大きくずれことが多いが、規則を覚えてしまえば、大丈夫である。それに対してデンマーク語ではスウェーデン語とは大きく事情が異なり、一つの文字が複数の音に対応する。上記デンマーク語の教科書の p.321 の「付録 1. 綴りと発音の関係」を見て分かるように、例えば文字 e は黙字も含め

ると 11 の音に対応する, 文字 i は 7 の音に対応し, 文字 g は 6 の音に対応する。デンマーク語では綴りと発音の乖離が激しいが, 綴りと発音のずれに規則がありそうなものとないものがあり, これらが混ざっているので難しいのである。

文字と発音の対応の予測が難しいものに形容詞の呼応変化の未知形変化がある。

規則変化の
mørk「暗い」を見
てみる。

共性单数形	中性单数形	複数形
-ゼロ	-t	-e
mørk	mørkt	mørke
[mø.ɪg]	[mø.ɪgd]	[mø.ɪgə]

次に lys「明るい」
を見てみる。

共性单数形	中性单数形	複数形
-ゼロ	-t	-e
lys	lyst	lyse
[ly's]	[lysd]	[ly:se]

文字上は lys, lyst, lyse と規則的に変化しているが, 発音を見るると共性单数形では母音 [y] に声門せばめ音 stød ['] が付いており, 中性单数形では母音が短く, 複数形では長母音になっていて, 発音上は規則的ではない。

次に god「良い」
を見てみる。

共性单数形	中性单数形	複数形
-ゼロ	-t	-e
god	godt	gode
[go']	[gɔd]	[go:d]

これも文字上は god, godt, gode と規則的に変化しているが, 発音上では, まず d の文字が読まれていない。また, 共性单数形では母音 [o] に声門せばめ音 ['] が付いており, 複数形では長母音になっていて, しかも中性单数形では母音が別の口の開きのより広い母音 [ɔ] に変わっていて, しかも短くなっている, 発音上は規則的ではない。

このように規則変化であっても, 母音に予測が難しい変化が起こるので, 正確に発音するには個々の発音を覚えなければならない。

次に動詞の規則変化第 2 類について見てみる。

betale「支払う」

不定詞形	過去形	過去分詞形
-e	-te	-t
betale	betalte	betalt
[be'ta'lə]	[be'ta'lðə]	[be'ta'lð]

次に føle 「感じ
る」を見てみる。

不定詞形	過去形	過去分詞形
-e	-te	-t
føle	følte	følt
[fø.լə]	[fø.լdə]	[fø'լd]

文字上は føle, følte, følt と規則的に変化しているが、不定詞形と過去形では母音 [ø] が長母音であるのに、過去分詞形では母音に声門せばめ音 ['] が付いている。この声門せばめ音がいつ、なぜ付くのかが分からない。

次に sluge 「飲み
込む」を見てみ
る。

不定詞形	過去形	過去分詞形
-e	-te	-t
sluge	slugte	slugt
[slu.ə]	[slugdə]	[slugd]

文字上は sluge, slugte, slugt と規則的に変化しているが、不定詞形では母音 [u] が長母音であるのに対し、過去形と過去分詞形では母音が短母音であるばかりか、不定詞形では文字 g が読まれず黙字であるのに対し、過去形と過去分詞形では文字 g が読まれて [g] と発音されている。これらの違いも予測不可能である。

次に bruge 「使
う」を見てみる。

不定詞形	過去形	過去分詞形
-e	-te	-t
bruge	brugte	brugt
[bru.ə]	[brågdə]	[brågd]

文字上は bruge, brugte, brugt と規則的に変化しており、sluge の sl- が br- に入れ替わっただけのように見えるが、不定詞形では sluge と同じように母音 [u] が長母音であるのに対し、過去形と過去分詞形では母音が口の開きがずっと広い母音 [å] に変わり、さらに短母音になっているばかりか、slugte, slugt 同様に文字 g が読まれて [g] と発音されている。これらの文字と発音のズレは予測不可能で、個々の形の発音を覚えるしかない。

以上見てきたように、デンマーク語では規則変化をする形容詞や動詞でも個々の変化形の発音は規則的ではなく、予測不可能であることがデンマーク語の発音を難しく感じさせている原因の一つではないだろうか。

3. デンマークの大学は日本の大学と同じようなものなの? それとも異なるのか? – コペンハーゲン大学について

都知事がエジプトのカイロ大学を卒業した云々ということがメディアで話題になったが、カイロ大学を卒業するということは日本の大学を卒業することに相当するのだろうかと、考えたのは筆者だけだろうか? メディアの人たちは「当然」日本の大学を卒業することに相当すると考えているものと思われる。このようなことを書くのは、デンマーク語専攻学生たちはデンマークの大学をどのように考えているのだろうかと思うからである。

筆者は1977年9月から1978年6月までデンマーク政府奨学生としてデンマーク王国コペンハーゲン大学人文学部・研究科言語学科印欧比較言語学専攻聴講生(*gæstestuderende*)として、そして1978年9月から1986年3月まで正規学生として、全部で8年7ヶ月間、印欧比較言語学を学び研究した。(なお余談であるが、当時はデンマーク人だけでなく、外国人も大学の授業料は無料であったので、筆者が正規学生であった7年7ヶ月間無料で授業を受けさせていただき、デンマークには大変感謝している。) 筆者は高校1年生3学期の時にそれまで目指していた天文学者への道をやめて、言語学の道に進むことに決め、大阪外国语大学デンマーク語学科でデンマーク語を学んだ後にコペンハーゲン大学言語学科で言語学を学ぶことに決めた。大阪外国语大学デンマーク語学科1年生の後半のどこかで、当時はインターネットがなかったので、コペンハーゲン大学につたないデンマーク語で手紙を書き、同大学に入るためにはどうしたら良いのかを調べた。それで分かったのは、日本人の場合は、コペンハーゲン大学言語学科に正規に入学するための条件は、① 日本の4年制の大学の2学年を終えているか短期大学を卒業していること、② デンマークで行なわれる外国人のためのデンマーク語検定 *Danskprøve 2* に合格していることである(因みに *Danskprøve* のレベルは1, 2, 3と3段階あった)。①に関しては「どうして?」と思ったものの、そういうことなら仕方がないと考えた。これは後に正規学生になった後、納得できる事実を知ることになる。まあ、いずれにしろ、筆者の場合は大阪外国语大学を卒業すれば①はクリアできるわけである。②に関しては、筆者は大阪外国语大学の2年生を終えた時に1年間休学して、デンマークの *Sproghøjskolen på Kalø* という語学専門のフォルケホイスコーレに留学した。4月から7月までの4ヶ月間外国人のためのデンマーク語コースに参加し、11月から3月までの5ヶ月間(デンマーク人のための)ドイツ語・フランス語コースに参加した。その間12月と1月にユラン半島にあるこのフォルケから *Danskprøve* の試験会場があるコペンハーゲンに行って、筆記試験と口頭試験を受けて、*Danskprøve 2* に合格した。これでコペンハーゲン大学言語学科に入学する準備が整ったわけである。

3.1. コペンハーゲン大学と日本の大学の組織面、課程面、学位面での違い

コペンハーゲン大学は日本の大学と違って、1479年に設立された北欧で第2に古い大学で500年以上の歴史がある（因みに北欧最古の大学は1477年設立のスウェーデンのUppsala大学）。ただこの事実は今はネットで簡単に調べることができるが、筆者がこれまで書いてきたことを読んで、読者は気づいたことがあるであろう。日本の大学は学部と大学院の組織が別になっている。大抵の大学では教員は学部に所属しているので、ニュースなどで「○○大学教授△△さん」などと紹介されているが、大学院を充実させるために旧帝大を中心に大学院重点化がはかられた結果、現在では16の大学が大学院重点化大学になっている。大学院重点化大学の場合には教員は大学院に所属している。それで、例えば、ニュースなどで「大阪大学大学院教授△△さん」などと紹介されるのである。一方、コペンハーゲン大学の場合は、学部と大学院の組織が一体化していて、教員はその両方に所属している。手元にある英和辞典、独和辞典、仏和辞典ではfaculty, Fakultät, faculté はどれも「学部」となっているが、コペンハーゲン大学のHumanistisk fakultetは「人文学部・研究科」である。

さて（これから書くことは筆者がコペンハーゲン大学にいた当時の事情である）、そのコペンハーゲン大学人文学部・研究科であるが、大方の学生が目指す学位 cand.mag.を見ると同学部・研究科の性質が分かる。cand.mag.とは candidatus/candidata magisterii（左：男性、右：女性）の略でその意味するところは、「教育（magisterium）の候補者・志願者」である。当時のデンマークの高校 gymnasium では教員はこの cand.mag.の学位を持っていなければならなかつた。この学位を得るために、修業年数4年間の主専攻科目 hovedfag と修業年数2年間の副専攻科目 bifag を終えなければならない。つまり高校教員は例えば、主専攻科目でデンマーク語・文学を修め、副専攻科目でロシア語を修めて、高校でこの2科目を教えるのである。そして hovedfag は2年間の第一課程 første del と2年間の第二課程 anden del に別れている。この第一課程は副専攻科目と見なすことができる。この第一課程/副専攻科目に合格すると「文芸学の試験を通った者」を意味する学位 exam.art. (examinatus/examinata artium) が与えられ、この学位は日本の学士号 B.A. に形式的には相応する（この「形式的には」に下線を付けたことは後に説明する）。さらに主専攻科目の第二課程に合格すると「哲学の候補者・志願者」を意味する学位 cand. phil. (candidatus/candidata philosophiae) が与えられる。この学位は形式的には日本の修士号 M.A. に相当する（しかしこの cand.phil. ≈ M.A. という説明は正確ではない。cand.phil. は同一専攻科目で B.A. を取得し、さらに M.A. を所得した場合に与えられる学位だから。一方、日本の修士号 M.A. は B.A. とは無関係に取得することができる。筆者が関わった例では、英

語学で学士号を所得した人が、高校時代にデンマークに留学経験があり、その後もデンマーク語運用能力を維持していたために、大阪外国语大学デンマーク語専攻の修士課程に入り修士号を取得したケースがある）。つまり上で例に挙げた高校教員は主専攻科目デンマーク語・文学で日本の学士号と修士号に相当する資格を持ち、さらに副専攻科目ロシア語で学士号に相当する資格を持っているのである。デンマークの高校教師の質のレベルがうかがえるであろう。別の言い方をすると、デンマークの大学で日本の学部卒にあたる *exam.art.*だけを持っていても職に就くことができない。自然科学の分野でもそうであるが、最低、修士号に相当する資格が必要なのである。

ただ、コペンハーゲン大学人文学部・研究科の学生全員が高校教師を目指すわけではなく、中にはその専攻分野の研究者になりたいと思う者がいる。その場合には4年間の主専攻科目 *hovedfag* の後に2年間の博士課程 *magisterkonferens* がある。この課程に合格すると「文芸学の教師」を意味する学位 *mag.art.* (*magister artium*) を取得することができる。デンマーク語の *magister* は元来ラテン語で、英語の *master* と同じ意味であるが、修士号の意味ではなく博士号を意味する。このことは例えばデンマーク語ードイツ語大辞典に明記されている：*dänischer Magister*; (= *mag.art.*) (*omtr*) *Dr.phil.* 「デンマークの *magister* は大体（ドイツの）*Dr.phil.* に相当する」。なお、ドイツの *Dr.phil.* とは「哲学博士」を意味し、*doctor philosophiae* の略である。デンマークにも *dr.phil.* はあるが、これは *magister* の学位を取得した者が数年間の研究生活および教授生活を経た後に博士論文を執筆し、その論文が認められた場合に取得できる学位であり、日本の「論文博士」に類似したものである。コペンハーゲン大学印欧比較言語学専攻の先輩たちが昔の経験をよく口にしていたが、「今度ドイツから『博士』が訪ねて来るというので皆緊張していたが、会ってみると、我々の *magister* と一緒にないか！」とがっかりした・安心したそうである。

3.2. 日本人がコペンハーゲン大学に入学するためには日本の大学の最初の2年間を終えていなければならない理由

このようにコペンハーゲン大学人文学部・研究科で最終的に取得する学位は *cand.mag.* か *mag.art.* であるが、コペンハーゲン大学新聞がある時調査したところ、大勢の学生が学業半ばで脱落していくが、これらの6年間の修業が必要な学位を最終的に取得した者たちの平均修業年数は10年間であったそうである。

ところで、日本人がコペンハーゲン大学人文学部・研究科に正規に入学するための条件の一つ、①日本の4年制の大学の2学年を終えているか短期大学を卒業していること、を上に示したが、これは次に示すことが分かれば納得できるこ

とである。例えば、コペンハーゲン大学でロシア語専攻の1年生になるためには高校 *gymnasium* の新言語コース *nysproglig linje* でロシア語を履修していることが条件である。つまりコペンハーゲン大学のロシア語専攻の1年生は入学した段階で例えば大阪大学外国語学部ロシア語専攻の2年生が終わった人と同じくらいのロシア語運用能力があるということである。ただ高校でロシア語を履修していくなくてもロシア語専攻に入学することはできた。ただその場合は入学後すぐさま他の学生と同じ授業に参加することはできなくて、大学が無料で用意する予備・初級コース *propædeutisk kursus* でロシア語の授業を受けなければならない。筆者もロシア語を学んだ際に最初は語学学校 *Studieskolen* に通ったが、そこでロシア語のこの *propædeutisk kursus* のことを知り、その授業に無料で参加させてもらった。デンマーク人の先生とロシア人の先生による2種類の授業があった。筆者が参加した時には筆者の他に2名の学生がいた。一方、筆者が正規学生となつた言語学科印欧比較言語学専攻に入学する前提条件は高校の古典語コース *klassisksproglig linje* でラテン語と古典ギリシャ語を専攻し、3年間みっちりと学んでいることである。また入学直後に渡される「自分で読んでおきなさい文献リスト」にはフランスのパリ学派の巨匠メイエのフランス語で書かれた全509頁の入門書『印欧諸語比較研究入門』 A.Meillet. 1964 (1922). *Introduction à l'étude comparative des langues Indo-européennes*. University of Alabama Press, Alabama. とハンガリー系の名前のセメレーニのドイツ語で書かれた全311頁の入門書『比較言語学入門』 Ozwald Szemerényi. 1970. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt. がある。つまりフランス語でもドイツ語でも言語(学)関連の専門書を読むことができる前提になっているのである(実際、筆者が8年7ヶ月の間に読んだ論文、文法書や教科書といった文献の6割がドイツ語で3割がフランス語、最後の1割の大部分が英語でその残りがロシア語、ポーランド語、リトニア語、ラトビア語などであった)。メイエの同書は、京都大学で印欧比較言語学を学んでいた修士課程の大学院生(菅原先生の古アイスランド語の授業を受けに来ていた)の話では、修士課程の院生たちが輪読会で読んでいるとのこと。つまりコペンハーゲン大学の印欧比較言語学の1年生は、言語学の知識は別として、ラテン語、古典ギリシャ語、ドイツ語、フランス語等の能力に関しては日本の京大や東大の修士課程の院生に匹敵するわけである(上の方で、「exam.art.は形式的には学士号 B.A.に相応する」とした背景である)。筆者はラテン語は勉強したことがあったが、十分ではなかったし、古典ギリシャ語は勉強したことがなかったので、コペンハーゲン大学が用意する高校補習コース *gymnasiale suppleringskurser* のラテン語と古典ギリシャ語に通った。両言語ともに3セメスター分の授業が週に4回あり、3回は

45分1コマで、最後の1回は45分・45分の2コマであった。1セメスターの授業が高校の1学年の授業に相当するものと考えられる。これらの授業には大勢の学生が参加していた。その大部分は神学部の将来牧師を目指す学生であった。歴史学科の学生は高校でラテン語初級試験に合格している必要があり、それに合格していない者もこのラテン語の高校補習コースに通っていた。知り合いになった学生は、「僕は中国史を学ぶのになぜラテン語をやらなければいけないんだ！」とぼやいていた。前述したようにラテン語と古典ギリシャ語の高校補習コースは参加者が多いので、通常の大学の授業が始まるよりも前の午前8時から開かれていた。

それから、コペンハーゲン大学では日本の大学の1,2年生の時に履修する一般教育科目あるいは共通教育科目というものは一切なく、いきなり専攻科目の授業を受けることになる。このことも、日本人がコペンハーゲン大学の正規学生になるためには、日本の大学の2年間を終えていなければならないという事情に関連があるかもしれない。

3.3. コペンハーゲン大学人文学部・研究科内の様々な専攻科目間の課程の違い

コペンハーゲン大学人文学部・研究科の各専攻科目の諸課程は、既に見たように、デンマーク語・文学専攻を例にすると、主専攻科目 *hovedfag* の第一段階 *første del* (2年間) と第二課程 *anden del* (2年間) と博士課程 *magisterkonferens* (2年間) であり、これが典型的なモデルである。しかしこのモデルからはずれている専攻科目もいくつかあった。筆者が専攻した印欧比較言語学は *hovedfag* がなく、*bifag* と *magisterkonferens* しかなかった。これを日本の大学にたとえてみれば、学部が終わった後、普通は博士前期課程 (=修士課程) が続き、その後、博士後期課程があるが、博士課程が前期と後期に分かれていらない状態に相当する。この背景は、筆者がコペンハーゲン大学で学び始めた1977年の2年前に人文学部・研究科の課程改革が行なわれたそうであるが、その時、言語学科の主任教授であったノルウェー人の印欧比較言語学者の Lindeman 教授が印欧比較言語学は高校の授業科目ではないので *hovedfag* はいらない！と言われたことにあるようである。言語学科にあったもう1つの専攻である一般言語学には *hovedfag* しかなく、*magisterkonferens* はなかった。噂では、考古学 *arkæologi* は *magisterkonferens* しかなかった。筆者が1977年9月にコペンハーゲン大学で学び始めた最初の授業の時、担当の先生が息を切らして教室に入ってこられて、「たった今、印欧比較言語学の10人目の *magister* が誕生した。印欧比較言語学の博士課程 *magisterkonferens* ができる50年目にである！」と声を発せられた。50年間の間にたったの10人しか課程博士が出ていないということである。

3.4. コペンハーゲン大学人文学部・研究科内の様々な専攻科目における試験のあり方の違い

試験のあり方も専攻によって異なる。デンマーク語・文学専攻のように各分野がモジュールに分かれており、モジュール毎に試験が課されたりレポートが課され、全モジュールがそろうと学位につながるというのもあるかと思うと、印欧比較言語学専攻のように、bifag も magisterkonferens も最終試験の一発勝負のものもある。magisterkonferens の場合は最終試験に加えて magister 論文も要求される。加えて非インド・ヨーロッパ語を一言語学ばなければならないが、筆者は日本語が母語なのでそのことを気にしたことではない。bifag の試験は 4 時間の理論に関する筆記試験、4 時間のラテン語、古典ギリシャ語、サンスクリット語の筆記試験、20 分間の公開口頭試験であった。筆者は大阪外国語大学に職を得て中途退学したので magisterkonferens の最終試験は受けていないが、恐ろしい噂をたっぷりと聞かされた。筆記試験は言語学科の図書室で行なわれる。bifag の試験も図書室で行なわれたが、図書室の本は見てはいけなかった。magisterkonferens の最終試験は弁当、コーヒー、お茶などを持参して、図書室に午前 8 時に入室して午後 6 時までの 10 時間で小論文的なものを書き上げるそうである。図書室の本はどれを使ってもよいのだと。この magisterkonferens の最終試験は 3 度落ちると 4 度目はない。3 度目に落ちると、それまで勉強してきたことが全てパーになってしまう。その先いくら学問を続けてもその分野で資格を取得することはできないのである。この課程が 50 年間存続してきて magister になったのが僅か 10 名であるゆえんである。もっとも magisterkonferens にいる学生数が少ないのもその背景であろうが。例えば、筆者と一緒に授業を受けていたのは magisterkonferens 課程全体で筆者の他 2 名のデンマーク人学生だけであった。同博士課程に籍を置いている者にアメリカ人学生の大先輩がいたが、彼はたまに図書室に現れるだけで授業には参加しなかった。そうしてもう一人大々先輩が 1, 2 年に 1 回言語学科に現れたが、その人の名前は分からぬ。bifag がある印欧比較言語学はまだましてある。筆者の 4, 5 名いた先輩たちは bifag が終わると皆、やめていった。magisterkonferens しかない考古学でも最終試験は 3 度落ちると 4 度目はないので、試験を受けるのが怖くて十数年間勉強を続けている人たちがいるという噂を聞いたことがある。

3.5. magisterkonferens と ph.d.における博士論文の指導状況の違い

1988 年に導入された博士課程 ph.d. は日本の博士課程同様に、3 年間の内に定期的に学生に博士論文の進行状況を発表させてそれを指導していくという体制を取っていると思われるが、筆者がいた magisterkonferens では論文指導は一切な

かった。授業中に一言コメントを言うと、先生が “Skriv!” 「書け！」と声を発するのである。論文を書け、ということであるが、magister 論文を書け、ということではなく、授業中に学生が気づいた点に関して学術論文を書け、ということである。つまり論文指導がなくても、日常の授業を受け、その授業の予習・復習のために多数の論文を読んでいれば、自分でも自然に論文を書くことができる状況になっていくということである。そのようなレベルの授業が展開されていたということである。先生に “Skriv!” と言われることが何回かあって、1985年4月上旬のある授業で筆者がコメントを言うと、先生が “Skriv!” と発せられたので、筆者は書くことにして、2ヶ月間学生寮の自室に閉じこもって調べ物をしながら 1 本の論文を書き上げた。1985年12月発行のコペンハーゲン大学言語学科の紀要ワーキングペーパーに発表した拙論 “On Winter’s Law in Balto-Slavic” である。印欧祖語のアクセントが現代バルト・スラブ語にどのように引き継がれてきたかを研究する歴史アクセント論の分野でドイツのキール大学のヴィンター教授が発見した音韻法則 Winter’s Law を修正した論文である。筆者がいた当時の magisterkonferens の magister 論文に関する説明では、magister 論文は同じジャンルの問題を扱った学術論文数本で代替することができるとあった。筆者は1987年発行の同紀要にもバルト・スラブ語の歴史アクセント論の分野でフィンランド人のニエミネン (Nieminen) が発見した音韻法則に関する論文も発表しているので、あと 1 本何かを書けば magister 論文の代わりになったはずであった。中退後、大阪外国語大学を休職して magisterkonferens に復帰し、最終試験を受けるつもりであったが、大阪外国語大学の図書館に筆者が必要とする本や雑誌が皆無に近かったので、印欧比較言語学を続けることができず、これをあきらめて、デンマーク語学に集中することにしたのである。筆者の師である Jens Elmgaard Rasmussen 先生は筆者よりも 10 歳しか年長でないのにも関わらず世界的な印欧比較言語学者であった。先生のもとで書いたヴィンターの法則に関する上記の筆者の拙論は多数の研究者に引用され、バルト・スラブ語歴史アクセント論の入門書 Roman Sukač. 2013. *Introduction to Proto-Indo-European and Balto-Slavic Accentology*. Cambridge Scholars Publishing. で詳しく紹介されている。コペンハーゲン大学の印欧比較言語学の授業が非常に優れたレベルにあることが分かるであろう。

以上、筆者がコペンハーゲン大学にいた 1977 年～1986 年当時の事情を説明してきた。1980 年代終わりから 1990 年代初めにかけて、デンマークの大学ではデンマークの外の国々の大学事情に合わせるか、あるいは比較しやすいようにするために、ph.d., Bachelor, Master などが導入されて事情は大きく変わっているが、そのことに関しては本稿では触れない。

Miscellanea Blandede

Resumé

Toshihiro Shintani

Denne artikel består af tre essays om forskellige emner: 1) Anvendelsen af internettet ved redigering af ordbøger er uundværlig, 2) Hvorfor er dansk udtale så svær at lære?, 3) Ligner et dansk universitet og et japansk universitet hinanden, eller ej? – om Københavns Universitet.